青年期における愛着が友人からのサポートの認識に及ぼす影響

14008PCM　沼田　早紀

問題と目的

Bowlbyは，子どもが愛着対象(主に母親)との間で繰り返し行われる母子相互作用を通じて愛着対象がどれだけ自分からの働きかけや要求に応じてくれる存在であるかどうか，さらには自分が愛着対象からの関心や援助を受けるに値する存在であるかに関する主観的な確信・表象を形成すると考え，この主観的な確信・表象を愛着対象，あるいは世界に対する内的ワーキングモデルとした（Bowlby, J，1973，(訳)黒田・吉田・横浜，1990)。幼児期における愛着スタイルの個人差はその後の対人関係様式や社会的な適応性の発達の違いに影響を及ぼすとされる。久保田(1995)は初期の親子関係の在り方が，その後の人間関係の形成に影響を及ぼすとし，丹羽(2002)は親への愛着と友人関係との間に関連を見出している。

丹羽 (2005)は，Collins & Read(1994)の研究で親への愛着から受けた対人関係傾向は，関係初期のような他に利用できる情報が無い時に表れやすいことが指摘されていることから，関係初期に焦点を当て親への愛着が友人関係初期にどのような影響を与えているか検討したが，友人関係が1か月以内という関係初期の為サポートを受けたり与えたりができるまでに至っておらず，友人関係からのサポートの認識と愛着に関連を見出せなかった。しかし本研究では，親子の愛着関係とは，親から子に対する情緒的サポートの有無やその加減,対応の仕方により，子どもが自分は愛着対象からの関心や援助を受けるに値する存在であるかに関する主観的な確信・表象を基盤として築かれうるものであり，その愛着スタイルを基盤としたサポートの捉え方は母親同様の長期的な関係で反映されやすく，またサポートの捉え方も類似するのではないかと考え，本研究では1年以上の長期の友人関係でのサポートの認識と親子の愛着関係のなかで起こったサポートの認識の類似性を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者

A 県内の大学生で調査参加に同意した男性18名，女性112名，計130名を対象に調査を行った。また，調査参加に同意した大学生の調査参加に同意した保護者に対し,調査を行った。男性9名，女性95名，計104名であった。

2.質問紙の構成

学生用の質問紙は，フェイスシート，サポート資源認知尺度，親への愛着尺度，から構成されている。保護者用の質問紙は，フェイスシート，サポート認知尺度から構成されている。

フェイスシート　学生用は，性別・学部・学籍番号・年齢について尋ねた。保護者用は，性別・子どもの学籍番号・年齢について尋ねた。

親への愛着尺度　丹羽(2005)の親への愛着尺度を使用し，5段階評価で評定を求めた。

サポート資源認知尺度　久田・千田・箕口(1989)によって作成された学生用ソーシャル・サポート尺度を用い，5 段階評価で評定を求めた。実験参加者への尋ね方として、一つ目は、最も友人関係の長い友人のイニシャル、何年関係が続いているかを記入してもらい、その友人から受けたサポートとしてどの程度当てはまるかを尋ねた。二つ目は、母親または父親を思い浮かべてもらい、今まで母親または父親から受けたサポートとしてどの程度当てはまるかを尋ねた。また，調査対象者の保護者に対して，子どもに行ったサポートにどの程度当てはまるかを尋ねた。この場合、質問項目の主語を「お子さんが」に、語尾を「ている」と言う形に改訂した。

結果と考察

本研究の結果から，友人からのサポートの認識と親からのサポートの認識は有意な正の相関

があることが分かった。このことから愛着スタイルや１年以上の友人関係ではそれ以上の期間の長短における影響を受けずに，大学生の友人からのサポートの認識と親からのサポート認識は類似することが分かり，本研究の仮説である親から受けたサポートの認識の仕方と友人から受けたサポートの認識の仕方は類似するという考えは支持されたと言える(表 1)。

表 1. 友人及び親からのサポート認識の相関

	友人からのサポート認識
親からのサポート認識	.317**

注)**p<.01

また，1 年以上の友人関係を持つ調査参加者を，10 年以下の友人関係を持つ群と 10 年以上の友人関係をもつ群に分けて分析した。相関関係と平均値の差の検定の結果から(表 2，表 3)，友人関係期間が短い群の人は，親が与えたと思っているサポートには敏感であるが，それ以上のサポートを望んでいると考えられ，本研究での愛着不安高群のサポートの認識の結果と類似していることがわかった。友人関係の長短と愛着スタイルでの関連は見いだせなかったが，愛着不安や愛着回避の得点は短群の方が高かったため，愛着不安や愛着回避は親からのサポートをさらに欲していることと関連があると考えた。

また，相関関係と平均値の差の検定の結果から(表 2，表 3)，友人関係期間が長い群の人は，友人からのサポート認識と親からのサポート認識の程度は強い相関関係であり，友人からのサポート認識と親からのサポート認識はほぼ類似しているといえる。このことから，今の愛着対象である友人に対しても，元の愛着対象である親に対しても，同程度のサポートの認識ができており，青年期の愛着対象は本来友人であるため親からのサポート認識のほうが低くなるように思われるが，親に対する依存が見えるとともに，友人を愛着対象としても見ることができている可能性があると考えた。

表 2. 友人・親からのサポート認識と親のサポート認識の相関

		友人からのサポート認識	親のサポート認識
友人関係10年以下	親からのサポートの認識	.204	.346*
友人関係10年以上		.547**	.366*

注)*p<.05,**p<.01

表 3.友人関係の長短とサポート認識の関連

	友人との関係の長短 短群	長群	t値
友人からのサポートの認識	56.939 SD(10.08)	58.125 SD(7.48)	0.76
親からのサポートの認識	55.167 SD(14.2)	58.344 SD(9.11)	1.51**

注)**p<.01

さらに，愛着不安・愛着回避の観点でサポートの認識を分析した。愛着不安の観点では，平均値の差の検定では，愛着不安高群のほうが低群よりも親からのサポートを低く認識していた結果から，愛着不安高群は親からサポートをあまり受けていないと思っているが，相関関係では強い正の相関であるため，親が与えたと思っているサポートは敏感に察していると考えられる。このことから，愛着不安の高い人は，親が与えたと思っているサポートには敏感であるが，それ以上のサポートを望んでいると考えられ，自分に対する存在意義や存在価値，自尊心などを高める為にサポートをさらに受けたいと思っているのではないかと考えた。

また,愛着回避とサポートの認識を分析では，「親からのサポートの認識」に対して「愛着回避」が有意な負の影響を示したことと，愛着回避と親のサポート認識の間に有意な負の相関が見られたことから愛着回避が高いほど，親に対して頼りたくない信用できないと思っており，サポートの認識は低くなった可能性があるだろうと考える。しかし，親からサポートを受けたくてもサポートを回避してしまう可能性や，親からのサポートを受けていると認識することが困難なこと，青年期という観点からこの時期は親からの心理的離乳の時期であるため親からの自立のための回避など，愛着回避についてのその過程には様々な要因が考えられる。そのため，愛着回避の質に関する検討が今後の研究の課題となった。